いつまでも忘れない

《母》

お母ちゃん　いってらっしゃい！
そこから始まる私の母への記憶
幼かった私は　寂しかったのかな？
一緒について行きたかったのかな？

母は後髪が引かれる思いだったと……

お母さん　ただいま！
細長い私の家は　突当りが台所
いつも母は　そこにいる
気がつくと　そこにいる

母は台所が　そんなに好きなのかな
そうではない
家族が多いので　休む時間がなかったのだ
たぶん……

朝寝坊をした時
玄関に　忘れ物をした
大切な　料理実習の〝じゃがいも〟

花麒麟

どうしよう　どうしよう
電話をして　持ってきてもらおうか?!
でも電話は職員室にある
そんな勇気はない
実習が始まってしまう
その時　教室の後の戸が　そ〜と開いた
小さな声で　私の名を呼んでいる
母の声だった
〝じゃがいも〟を持ってきてくれた
学校に来たことは　ほとんどないのに

その時　私は小学五年生

洋服のことでいつも文句を言っていた私
襷のあるプリーツスカートが欲しかった

遠足の前の夜　母はミシンを踏んでいた
遅くまで

遠足の朝　私の枕元に
襷のあるプリーツスカートが
置いてあった

《息子》

お兄ちゃんだから　お兄ちゃんだから
そんな言葉の積み重ねが
お兄ちゃんの重圧になっていたようだ

好きでお兄ちゃんになったわけでは
ないのにね
だけど　生まれた順番だから……
ごめんね　お兄ちゃん

悲しかった時　行くところがなくて
別々に暮らしていた　長男のアパートに
行った
驚いていた長男は　その時二十歳
着の身着のままで　転がり込んできた私

息子はとても心配していた
ぽつりと言った息子の言葉
「もう　戻らなくていいんじゃないの?!
ここにいれば?」
私は嬉しかった
黙って俯いて　泣いていた

時々戻った我が家
もう一人の息子に
「弁当　作れなくてゴメンネ!」と私
「大丈夫　僕　六百円あれば足りるから」
張り裂けそうな胸を　両手でぐっと
押さえた
六百円は一日分のお金……